

## 幼小中高大共通にみられる学習上問題となる傾向について

— 保育事例を通して —

結城 敏也\*・結城千代子\*\*

教育を通して、児童や生徒は様々な概念を生成、形成してゆく。その中では、日常的な生活感からは獲得することができないパラダイム獲得が重要な課題となっている。このようなパラダイムは数千年にわたる文明の発達の中で抱かれ、検証され、育ってきたものである。そのために、日常的経験の中から自発的に浮かび上がるものではなく、そのパラダイムを獲得したものから、学習者の中でパラダイム獲得が起きるように誘導する必要性が存在する。すでにパラダイム変換を経由している教師、特に自分の場合にパラダイム転換に苦勞しなかったものの場合には、「学習者が新しいパラダイムを理解できない」ことが理解できないことが多い。これは過去の論文「小学校指導要領改訂にみられる傾向性から、高等学校までの一連の理科概念形成に関する問題についてⅢ（茨城キリスト教大学紀要第48号2014.12）」などでものべてきたが、教育を通じた児童あるいは生徒の概念形成に置いて大きな問題点となっている。また、同様の概念形成において、昨今の実体験不足などがどのような点で大きな問題となるかも述べて来た。

今回は幼稚園に置ける事例研究を通して、これらの概念形成の問題を異なる視点から一考してみたいと思う。

言うまでもなく幼稚園に教科書のような教材はないので、そこでの概念形成に関する情報は、もっぱら現場の事例報告に負うしかない。しかし、多くの場合、幼稚園に置ける事例報告は、情緒的成長あるいは社会性の形成に関する状況報告や判断、評価が主となり、客観的な事象や子どもの発言そのもの、あるいは自然科学に関する話題等は記録からこぼれ落ちがちである。

今回、事例研究を行った幼稚園は自由遊びを重視し、遊びの中での子供の発達を先生方が良く観察補助していることが垣間見られる。その中で書き留められた保育日誌には、様々に興味深い事例が子どもの発言そのものを記録しつつ、描き出されていた。

特に遊びの中で、対人関係のプロトコルを覚えていく過程についての良い例が現れている。同時に、私たちが、潜在的な社会成員としての子供が、「先生」とは異なった認識の枠を持っていること、大人であれば「当然」と考えるような語義、観念を所持していないことを気付かせる場面も記録されている。

いくつかの事例と、事例研究でかわされた発言を元に、概念形成の上で一考しておきたい点を検討する。

---

\*茨城キリスト教大学

\*\*昭和大学兼任

### ＜大人と子どもの認識枠の差の問題＞

子供が「先生」とは異なった認識の枠を持っていること、大人であれば「当然」と考えるような語義、観念を所持していないことを気付かせる事例から挙げてみよう。

一つ目は逸脱した行為をやめない二人を叱って室外で反省させようとした担任の報告であり、二つ目は叱られて室外に出て来た二人に出くわした担任外の教諭の報告である。

もも組の子ども達も一か月弱生活し、年長としてよいこと、いけないことなど、クラスの約束事もわかりつつあります。だからK君とH君の行動を見て、おかしいことを感じ、しばらく静かにしていた子ども達でした。「2人はどうしたら、やるときにやってくれるかね」というと、「ちゃんとやるときはやらないとだめだよって言ってあげるしかないね」と子供たち。「だから、今回は、いいよって言ってあげよう」といって、二人をクラスに呼びました。

今日の集まりの時間に、私は年長組の廊下で作業をしていたのだが、もも組のNくんとHくんが担任の先生から注意をされクラスを出され廊下に出てきた。しばらく様子を見てみると、二人でヒソヒソ何かを話し、水道の水を手に取りおでこや髪の毛に付けだしたので何をしているのかと思ったら、どうやら担任の先生の「頭を冷やしてきて下さい!」との言葉をそのまま受け取り、二人で相談した結果、真剣に水道の水で頭を冷やすことにしたようであった。このままだと何か違う方向に行きそうであったので、「どうしたの?」と話を聞くと「ふざけちゃったから」と言うので、何故注意をされたのか、何故ふざけてはいけないのか、今度からどうしたら良いかの確認をしてしばらく反省の時間を持っていた。そしてクラスに戻り他の子ども達にも謝りいつもの生活へと帰って行った。年長になり少しずつ今は何をしている時間か、周りの子ども達は何をしているのか、自分はどうするべきか等自ら考え行動していけるようになってはいけませんが、今はそれを出来るようになった子どもとそうではない子どもが居て、出来ない子ども達は今それが出来るようになるべく学び中といった様子であるので、陰ながら見守っていき、必要な時には援助をしていきたいと思う。

「頭を冷やしてらっしゃい」という先生の叱責に、実際に水道で水をかぶるという行動などには、この世界理解の枠組みとしての言葉の世界に差異がありことを示している。大人が日常的に使用する暗黙知を前提とした慣用表現とか、文化的背景があって初めて意味を持つ語句、たとえ、慣用句、ことわざなどが理解されず、字義通り捉えられることを注意しなければならない。このような事例に繋がる言葉は、多くの先生があれこれと思い当たるに違いない。「頭を冷やす」以外にも、「油断」「書き損じ」「約束を破る（びりびり破く意味でとらえる）」で同様に思わぬ際を突きつけられる報告があった。

このようなものについては、出会うたびに教諭間で情報を共有し、機会があった場合にバックグラウンドとなる逸話とともに紹介する必要がある。

お弁当の時間に、一緒に食べている子ども達がクイズを始めた。子ども達が考えたクイズなので、問題も答えもめちゃくちゃだが、子ども達同士では成立して楽しくやっていた。子ども達ってすごいなと感心してしまった。「ブロッコリーはブロッコリーでも食べられないブロッコリーは何でしょう？」の答えは「焼いたブロッコリー」だった。私は何で？と思ってしまったが、子ども達は「あー、なるほどね。」と納得していた。「家は家でもすぐに壊れる家は何でしょう？」の問題に「ブロックの家」などと答えを出し合っていたが、Hちゃんが「ボロイ家」と言ったことにとても笑ってしまった。子ども達は私たちが想像する以上のことを言ったり、考えたりしているのとてもおもしろく毎日笑って過ごしている。時間に追われるのではなく、子ども達とのやり取りや言葉に耳を傾けていきたいと改めて思った。

Nくんが私に一生懸命に訴えているのですが幼いので聞き取れず、年長さんに「なんて言ってるの？」と聞くと「ああ、のどかわいただって」と通訳までしてくれました。その通りでした。本当に小さな先生です。

笑い話のようであるが、子どもの理解の枠と大人の理解の枠は如実に違う糊塗を表している場面である。違うことを受け入れる余裕が大人側にも必要であることをこれらの例は示している。

G君は、真面目な面があり新たな発見をした。牛乳を飲む子に銀のシールをつけて、本人も忘れないで準備ができるようにしている。しかし、それが取れてしまったことに私は気が付かなかった。すると、シールがないから牛乳が飲めないと思ったらしく準備をしなかった。「シールが取れた。」と言うのではなく、シールがないから牛乳が飲めないと思うのだなと思った。子どもって、素直だな…言われたことが正しいと思うのだなと感じた。子どもの受け取り方と私の考えが必ずしも合うわけではないので、きちんと意味がわかるようにいろいろな言葉かけを使って話をしていきたいと思う。

約束事なども、適用範囲や、どのようなことが逸脱になるのかなどの「大人の常識」は子どもにとっては全くの新たな枠組みであり、どのような枠組みで捉えているかを存外大人は把握していない。上記の例はその一例であるが、子どもなりの論理展開を丁寧に追従することの重要性を示してくれる。

いつも上手にお絵描きをしているRちゃんが、水色のクレヨンで四角を描き、周りの子どもたちをちらちら見ながら目に涙を浮かべていました。「線を描いてごらん」と言葉かけますが、固まってしまっていました。「一緒にやってみよう」とRちゃんの手を取り、水色のクレヨンを真っ直ぐすべらせました。「他に好きな色はある？」と聞くと「紫！」と答え、やり方が分かった様子で、すらすらと描きはじめました。お絵描きが上手だからといって、できると決めてしまったことに反省しました。

「線を描く」という指示の意味が分からなかったようである。「線」という言語を理解できなかったのか、「線を描く」という概念がなかったのかもしれない。

大人にとっては思わぬ場面において、このような状況が生じてくる。

幼児期にはできない、分からないという様子がまだ把握しやすいが、年齢を重ねるごとに子供はわからないことを糊塗するようになる。また、言われたことをわかった気になっているが、実は理解していないなどの状況が生じてくる、こうして、教師の側からするとその場面場面で子供が陥っている問題点が見えにくくなる。

大人と子どもの認識枠の差は、学習が進むにつれ「パラダイム転換の必要性を認識できない」または「パラダイム転換を促せない」教員の問題を生み出す。上記のように、幼児期に認識枠のずれは多岐にわたり、大人の予想の斜め上に行く。が、一方で修正がききやすく、この段階でずれをいかに丁寧にすりあわせてきたかで、その後の小、中、高の学習成果に大きな違いが出うことは自明であろう。

### <自発性と環境>

遊びの環境をつくることはきわめて大切である。今回の事例の幼稚園には園庭の他に、林を背にした広い芝生がある。芝生には一切の人工的な遊具はない。そんな何もない自然の中で生まれる自発性は大切であり、この幼稚園の財産である。

お弁当の後の砂場では、子ども達と落とし穴を掘ったり芝生でカラスノエンドウを集めたりと楽しく過ごせた。カラスノエンドウは、数日前から子ども達が集めていて、どこにあるのかな…とずっと思っていた。今日、教えてもらったが子どもの目線だからこそ見つかるものだなと思った。子どもからすると、同じ芝生でも季節によってたくさん宝物があるのだなと思った。

このような体験は狙っても容易く作り出せるものではない。

また、汚して遊ぶことの大切さも見逃せない。最近、糊を使うことを嫌がる子どもが増えているという報告を聞く。子供達の成長にとっては、思い切り汚してダイナミックに遊ぶ体験の不足は看過できないものがある。このような、汚れながらの遊びを実現するには保護者の理解が必要である。「きれいな教育現場」ではなく、「どろどろに汚れながら遊ぶ」ことの大切さを、保護者に対してアピールする啓蒙活動も教育の一環として見逃せない。

いつも、どんなときも、必ず室内遊びオンリーだったZちゃん。昨日から、裸足になると今度は一目散に外遊びで出かけ、砂場でよく遊びます。H君も、ドロドロになって本当に楽しそうに遊んでいました。泥んこになって夢中に遊ぶ姿を見るとこちらも癒されます。

がむしゃらに遊んでいる中で、上から水を入れるとはねて自分や友達にかかる体験をしたり、水と砂の混ざり具合でドロドロとろとろの感触の違いを味わったり、さあ、

本格的にドロンコになるぞと思う時には、あらかじめ体操服の名札バッチを取るという生活の知恵を働かせたり、自分ひとりで楽しむのではなく周りの皆で水を流しいれ川を掘って長く伸ばして広げるダイナミックさを心地よく感じたり……。水遊び・泥遊びのひと時には、子ども達の開放感やストレス発散以外にも様々な恩恵があります。体操服や下着を洗って重たいお土産を絵本袋に入れて帰る子ども達は満足感あふれる表情で、こちらも嬉しくなります。泥んこの体操服や下着を元通り白く洗い上げるのは結構大変だと思いますが、お母様方も文句を言わずに嬉しく受け止めてくださるので助かります。

様々な体験を積み重ねている子どもは大きくなったら自分の意見を発言できる人間になる。人間の思考は、自分が所持している知識ベースを土台として、出会う体験を解釈し、その体験に対する対処法を作り上げる。しかしながら、知識は単に記憶しただけでは役に立たない。知識を自分の体験と有機的に結びつけ、かつ各知識項目の間の関連性を付けていないと、せっかく覚えた知識もペーパーテストで高得点を獲得するためのものとはなり得ても、自分が体験している問題を解決する役にはたさない。ファイアアーベントの言ったように、単に知識を記憶していても、その知識を現象と結びつけ世界解釈の道具として使用できるように、沢山の経験を幼児期から積んでいかないと「頭のいいバカ」を作り上げることになる。

外遊びをしていた年少組のK君とH君が「先生！大変。滑り台がね、熱くなってるから、やけどするよね。三角コーン、置いた方がいいんじゃない？」と慌てて私に教えに来てくれました。「どれどれ」と私も外へ出て、確かめると確かに熱くなっていました。「ほんとだ。気づいてくれてありがとうね。助かった」とお礼を言って、三角コーンを置くお手伝いまでしてもらいました。入園してたった2か月で、そんなことまで気づくことができるとは……。なんだか成長を感じてジンとしました。

身体的な体験を積み重ね、知を体得していくことは大切である。体験を積みかさねないままに成長した人間は、知識・理論はわかっているけれども 現実とかみ合わない人間になる。

自由遊びの中で、ばら組Kちゃん、ゆり組Sちゃん、ゆり組Hちゃんの三人がログハウスの中でままごと遊びをしていた。その時Kちゃんは赤ちゃん役をしており、私に抱っこやおんぶを求めてきた。Kちゃんは先月弟ができ、本当に小さな赤ちゃんが泣いているように大きく泣く真似をしていた。Kちゃんは昨年たんぼぼ組で一年間一緒に過ごして来て、昨年ままごと遊びの様子の中でも赤ちゃん役は嫌でどうしてもお母さんやお姉さん役になりたいと友達とケンカしている姿が懐かしく思う。自分に嬉しい弟が出来た事をきっかけに、ままごと遊びの中で赤ちゃん役も存分に楽しんでいる様子だった。その姿を見てHちゃんも赤ちゃん役をやりたいと興味を持っている姿も見られ、皆が赤ちゃん役の魅力を感じ取っている様子がとても微笑ましかった。



今回の事例研究で、保育者が子供達の遊びのなかに能動的に関与しながら「教える」とか「誘導する」というかたちでできることはほとんどない。子供達が、萎縮せずに、教師の指示とか誘導に唯々諾々と従って「新しい体験」を獲得することが重要なのではない。子供達自身が意図的な教示による誘導によって獲得するとう「体験」を与えるのが必要なのではない。むしろ、子供達が自由な遊びの中で自発的に内側からなにかをつかみ出すことができるような環境を整備することこそが教師の責務である。このことを幼児教育に従事する人間が認識する必要がある。自発性が伸びる環境作りが重要なのだ。

風が強く吹いていたこともあり、幼稚園のしだれ桜の花びらが綺麗に空に舞い散っていました。ばら組の中MちゃんとSちゃんは、舞い上がる花びらを見て、「見てー！キレイ」「雪がいっぱい降ってるみたいー！」「あ、飛行機も飛んでる！」と大興奮でした。Nちゃんは、芝生にたんぽぽが綺麗に咲いているのを見て、「わー！雨が降ったからいっぱい咲いたね。綿毛はまだかなー？」と嬉しそうに言っていました。Nちゃんは、綿毛ができるのを待ち遠しく思っているようです。久しぶりに園庭に出たことで、春の景色がたくさん増えていることを実感し、子どもたちの嬉しさも倍増したのではないのでしょうか。春を体いっぱいに感じている子どもたちの姿は、とても生き活きと輝いていました。

D君がバスの中で、「先生、さくらなくなったね。どこにいったのかな？」と聞かれたので「今度の春に、きれいなお花を咲かせる準備をしているよ。」と伝えると「そうか、さくらの花びら、雪みたいだったね。」と言っていました。自然を見て感じ、それを表現するD君が素敵でした。

お弁当の前の時間の自由遊びでは、室内でも外でもどちらでもいいと声を掛けて遊んだ。室内では、工作が好きな子達が何か思いつくものを作っていた。今までの製作で大目に準備していて、もう使わないので工作コーナーに出した。すると、ペンダントを作ったり、ゆきだるまなど思い思いのものを作って、うれしそうに見せてくれた。外では、水を出して池や川を作って遊んだ。足を入れてみたり、砂を上から落としてみたりと感触などを感じていたように思った。様子を見ながら水を出したり、一緒に穴を掘ったりしていた。子ども達もとてもいい表情で遊び、一緒に協力して作る姿からも少しずつ成長してきたなと感じた。

事例研究の際には、このような遊びの時間を大切にしたい。しかしながら、実際の教育現場で遊びの時間をいつでも十分に確保できるかという点、そうはいかないのが現実でもある。先生方とのディスカッションの中でも、カリキュラム・スケジュールのあり方の見直し・改善が必要であると言う反省が出てきた。カリキュラムやスケジュールを日にち単位ではなく、月・週単位での見直しをもって組むなど、流動性をもたせることが大事であろう。いずれにせよ、何が正解でなにが不正解かということは無いに等しい。おかれた環境の中で保育者がベストの環境をつくるのが大事である。

そして、折々に遊びのきっかけが自発的であるか、子どもの姿を見直してみることも忘

れてはいけないうであろう。子ども達がこれをやろうという気持ちが高まると自分の遊びもより充実し、よく、できないと問題になる「片付け」などにも気持ちが入るのではないだろうか。

昨日年長組のKちゃんが自分で作った紙芝居を読んできた。一緒に来たNちゃんはカメラマン役でいっぱい写真を撮っていた。この紙芝居はKちゃんが作ったから、売っていないし世界に一つしかないんだよ。と伝えると子ども達は驚いていたようだった。その印象が強かったようで、「私も紙芝居作ってみようと思っているの。」「昨日の年長さんすごかったね。」と素直に感じたことを教えてくれた。年長は一番身近にいる頼れる存在でもあるし、憧れの存在でもある。いろいろ刺激を受けて、今の子どもたちなりにやってみようと思ってくれればいいなと思う。

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」とロバート・フルガムは述べている。これは遊びの大切さを伝えてくる以上に、自発性を育む環境の重要性を示す言葉に思える。

これは子供のなかに宿る神性を重視し、それが妨げられることなく花開くことを望み、修学前教育施設ではない、学校とは異なった施設として、子供達が自由に遊ぶことのできる庭として「幼稚園」と言う疑念を提示したフレーベルが主張していたことでもある。

### <数の体験>

数への理解はやはり体験を通して自分のものになって行く。数を数えてお風呂であたたまる場合は連続した数列、一番！二番！と先を争って列を作る順番、時計の針が3に来るまでに着替えてね…と言った数表示、必要な個数を選び出す、持っているものからいくつかを人にあげる、友達と同数に分けるといったカウントの機会など、生活や遊びの中にある、数の体験はすべて重要な数学の基礎である。

芝生で、さくら組のNちゃんと走り、順位を決めて遊んでいました。すると、Hくんや、Kくんも加わり、4人で順位を競い走ることができました。

その後は石垣に生えている笹の葉で笹船を作って遊んだ。子供たちから「水に浮かしたいね！」との声も出たので、今日は特別に砂場の道具に水を入れたものを芝生に持っていき、笹船を浮かべて遊んだ。子供たちは「あっ！浮かんだ」「小人さんなら10人は乗れるかな？」「あっ！虫さんなら乗れるかも！アリいるかな？」などと言って、さまざまに想像を膨らませて楽しんでいったようであった。

最近、子ども達が数を使いこなせていないと、数学の研究者から指摘され気をつけて見ている。数が使えないというのは、暗記学習で足し算を丸暗記させるため、数字上の計算(ちゃんと覚えているものに関してのみ)は出来るが、その場にある石2つと3つを足すといくつか聞くと分からないという意味である。つまり、「1足す1は2」と言う言葉は知っているが、実物と一致していないわけである。暗記学習が先行していて、あまりにも実体

験が不足している。集団遊びや兄妹関係の減少、核家族化、デジタル化などによる、「たくさんあるから数える」そして「数え分ける」「幾つ余るか、足りないか」などといった、当たり前であった生活経験まで失われている。

また、声を出してもものを数える機会が少なくなっていることも、数詞に対する感覚を鈍くしているように思える。おたまじゃくしや虫を1個2個、虫を1人2人等と正しい数詞を使えないという事例が保育現場では頻出している。もちろん、幼児期はものごとを学んで行く時期で、間違えることに価値があることは当然のことではある。しかしながら、数詞の間違いの事例は、家庭生活で指摘されないのだろうか疑問に感じる程、多くなっている。これも早期教育の悪影響のひとつと思われる。その理由としては、俗にペーパーと呼ばれる幼児用の絵試験などがあるこのペーパーでは、幼児が数を数えるという経験をまだ積んでいない時期に、図面上での数えを覚えさせられる。経験を通していない為、感覚的な理解が出来ないので、様々な場面に応用が利かないと考えられる。

今回の事例研究で上がった考えられる対処方法として、「保育者が意図して数えて示してみる」がある。例えば、保護者に渡すための手紙をうちにもって帰ってとただ渡すのではなく、「お手紙、今日は3枚よ。」と言葉を足したり、着替えの際にくつしたが落ちていたら、「1足落ちてたよ（1つ2つではなく。）」ときちんと指摘するなどである。

また、ものを分ける事が出来ない子ども達もいる。このことも念頭におきながら、幼児期になるべく木の実などを分ける体験、数を意識しながら友達と同じ量ずつに分配する体験などを多くさせていきたい。

年少組の子どもたちの会話の中で、数を数える場面が多く見られます。Hちゃんは、お仕事コーナーで四角つなぎをしていました。長く繋げることができ、1、2、3、,、と数え、自分の繋げた13まで、数えることができました。また、Kくんは、ブロックで電車を作り、繋げ1、2、3、,、と7個まで、数えることができました。Kくんは、以前、口で数える数と、指で数える数が一致していないことがありましたが、数えられるようになっていて、成長が見られました。

実体験をしていればしなくても良い勉強をさせるのが早期教育である。その弊害をへらすには、恵まれた自然環境を十分に活用し、子ども達の沢山の気づきに一緒に喜んだり、感じたりする援助を惜しみなく与えて行くしかないように思える。

### ＜自然観の形成と実体験＞

報告の中で個人的に秀逸だと感じたものにダンゴムシの脱皮がある。

また、ダンゴ虫にどっぷりはまっているUちゃん。今日は「先生、なんかこのダンゴ虫、お洋服脱ぎそうかもしれない・・・。」とむしかごを持ってきた。良く観るとそこには本当にダンゴ虫の体半分が白かった。半分は既に脱皮しているようで、残りの半分が残っていると言う状態だった。滅多に見られないダンゴ虫のその様子に子ども達



は「見せて、見せて!!」と押し合いへし合い。以前ダンゴ虫の絵本を読んでいた為、子ども達にもその現象がとても良く理解できているようだった。

このような幼児の体験は、先生の解説を聞く、図鑑を見る、ビデオを聞く等といった受動的な体験を通して与えられる静的な知識とは異なるものを子供達のなかに育て上げる。大人からあらかじめきれいにまとめられた知として与えられるものは子供の日常的な体験とはそのままで位置するものではない。あくまでも成人としての共通理解として人類の文明の進歩のなかで積み上げられた知の体系に沿って説明される。ビデオなどでダンゴムシの説明を聞いたことがあれ子供であれば「だんごむしがだっぴしている」というひょうげんをつかうだろう。しかしここでは、「お洋服を脱ぐ」という表現がとられる。これは、子供がこれまでの生活のなかで培ってきた世界理解の枠組みを、「だんごむしがおようふくをぬぎそう」という発言であらわしている。ここにみられるのが、世界を現象として観察している子供が、自分が観察した事象を、自分が持っている語彙で表現し尽くそうとする事態であり、これこそが子供の能動的な知識獲得の過程といえることができる。

「先生、おたまじゃくしがカエルになった!」とクラスの水槽を毎日見ている子ども達が、おたまじゃくしの変化に気が付いて大騒ぎをしていた。週明けの荷物や、上履きなどはそのまま、とにかくおたまじゃくしを見たいという子ども達ばかりだった。子ども達の反応はとても良く「手と足が生えてる」「でもしっぽは残っているよ。」「壁に登っている!」と気が付いたことを声に出して、友達と話をしていた。子ども達は虫が大好きで、クラスで飼うと毎日その様子を見て変化を楽しみにしている。子ども達もおたまじゃくしを見たい子ども達で混雑して、ぶつかった…押された…ということが何回かあったが、見たい気持ちもわかるが見たら次の友達に代わってあげたり、順番を待つことも大切だと話をした。「餌をあげよう。」「水草取ってきた方がいいんじゃない?」といろいろ考えていた。今後も子ども達と変化を楽しみながら育てていきたいと思う。

「先生! カエルになってるー!!」と朝一番におたまじゃくしの変化に飛びついた子ども達。大きな石の上に3匹確かにカエルがいた。嬉しさのあまり、カエルを手取る子ども達。しかし、お昼頃になるとカエルに異変が起こった。数匹のカエルが水の中でぷかぷかと漂っていた。「先生、このかえる、死んじゃったのかな・・・?」と気づいた子ども達。やはり、と思い、子ども達に話をした。人の手は温かいから、かえるにとってはそれがとても熱く感じてしまう。お湯を沸かした時のやかんに触ると熱くてやけどしちゃうでしょ?と言う話をした。子ども達はシーンとなって聞いていた。特にカエルを触っていたのはR君だ。可愛いから触りたいというR君の気持ちもよくわかるが、その結果がこれだ。という現実を息をのんで聞いているようだった。「わかった、もう触らない。」と言っていたのでカエルには申し訳ないが良い機会だったのかもしれない。

自然の中で遊ぶことによって、暑さ寒さ涼しさといった感覚が養われ、生物の成長と死を観察することによって、子供達の中に、現象の世界ときっちりと結びついた世界理解が育まれていく。

最近では年少児も裸足になり始め、気持ちよさそうに遊び回る姿が見られている。裸足で熱い砂や冷たい砂、または泥を踏みしめ、「熱い!」「冷たい!」「痛い!」「気持ちいい!」等と言って、沢山の感触を肌で感じて喜んでいる子ども達である。全身を使って様々な感覚を刺激できる遊びの素晴らしさを感じるのであった。

このような経験が、観察力、表現力、認識力を磨き、後述の五感を利用した活動に繋がって行く。

一緒にたんぼぼ探しをしました。たんぼぼでも開き方が違うことを発見した子供たちは、「あっ、これお日様みたいになってる」と思い切り花びらが広がっている様子を見て、想像していた子供たちでした。

降園の時にわざと黒い靴を前後反対に履き、「どうしてこれだと履きにくいのか?」といういろいろな不思議が気になるようだった。大人だと当たり前になって、不思議と思わないことも子どもには大きな不思議で「なんで?なんで?」と思うことが当たり前なのだと思った。

上記のように、自発的な観察、発見を重ね、大人に肯定的にその体験を評価してもらうことが、更なる段階へと子ども達を引き上げて行く。

以下は、五感の中で匂いを利用する場面である。五感の活用程、体験無しに成立しないものはない。子どもの自発的なアイディアとして「匂いで探す」という発想が出て来たことは、大変価値がある。前段階にあたる「梅の実はいいい匂いがする」「なにかうまい探す方法を考えた方が見つかる」等といった、体験や思考の経験がなければかなわないことである。経験、観察、好奇心、探究心、知の活用といったキーワードが凝集している場面である。

朝の自由遊びでは、あじさいの下に梅が落ちていました。それを見つけたS君とU君に「梅の実・・・もらっても良い?」と聞かれたので、「食べなければ良いよ。」と伝え、「大丈夫。」という事で、2人に梅の実を取って渡し終え、Z君が来て「僕も、梅欲しい。」と言いました。2人に上げた後だったので、もうない事を伝えました。U君とS君は、「一緒に探してあげる。そうだ、匂いで探そう。」と3人で梅の実探しが始まっていました。匂いで探そうという発想が素敵だと思いました。

このような体験なしに、視聴覚教材のみを通して自然を理解する場合には、子供達のなかでの身体性を持った世界像の構築は失敗し、現象と切り離された単なる知の集積を持つに留まってしまう。

バス待ちの自由遊びの時間に、ゆり組のIちゃんがスイセンの葉を拾い、ログハウスの下の土に植え、畑ごっこをして、遊んでいました。「ねぎを、植えているんだ」と、地面からスイセンの葉が出ていて、本物のねぎ畑のようになっていました。「水を撒いているよ」「収穫するよ」と楽しそうにねぎを育てていました。そして、今度はその収穫したねぎで、おままごとをし、チャーハンを作っていました。遊びの中で、畑に植えるところから始まり、育て、収穫をして、料理をするという想像力の豊かさに驚かされました。また、今年中組で育てているトマトも、Iちゃんの遊びにとって良い影響があったのではないかと感じました。

これは、様々な体験が一綴りの遊びとして表出しているよい例である。遊びが総合的な学習に勝るとも劣らないことをはっきりと示していよう。

園庭で遊んでいると、ゆり組のRちゃんが種を見つけ「これ、何の種だろう。」と聞いて来ました。「何か分からないから、植えてみる？」と言うと頷いたので、花壇の端に穴を空けて植えました。もう一度同じ種を見つけて「さっき、ここに埋めたから近くに植える。」と嬉しそうに植えていました。芽が出てくれの？が楽しみです。

今回の事例研究で、この話題を前提に、子ども達が見つけて試したい種を植える『なんでもプランター』を作ってみては？という案が出ていた。良い環境作りの一つではないだろうか。

### ＜「聞けない・言えない」の問題・コミュニケーションの重要性について＞

最近の幼児教育の現場では、以前と比べて子供達が先生の指示を聞かないということが問題になっている。個に対する指示はまだしも、集団に対して物を言うとき、直後に指示を聞き直したり、指示以外の行動をするケースが目に見え、また、遊びの時にも玩具とか遊具の譲り合い、かわりばんこなどがなかなかできない。すなわち社会性が未発達である。そのため自主的な集団行動はもとより、指示された集団行動が取れない。集団行動には集団の構成員や指示者との間で意思の疎通が不可欠であるが、やり取りそのものが不足し、また内容に関しても互いの理解能力が欠けている。

これについては、筆者達が日常的に接している大学生においても類似した現象がみられる。実習などの活動に関する指示に出会ったときの学生の行動は二極化している。望ましい学生は指示通り、あるいはそれを上回る洞察を持った価値ある行動を当たり前にとれる。一方で、顔をこちらに向け、聞いているようでありながら、指示内容を全く咀嚼できずに、直後からあり得ない逸脱を行う学生も多い。まるで、「ペンを右手に持ってください」と言われた直後に、「はい」と言いながらペンには目もくれず、足でボールを蹴るくらいの脈絡のない逸脱が、立派に言語を解する大学生の学習行動として起こりえるのである。指示の聞けなさの程度には空恐ろしくさえなる。

また、小学生から高校生にかけても教育研究所クラフォサを主催している薦田安美知氏からも、このところの子どもにまみ見受けられる例として、「とてもよく聞いている風で、

実はほとんど聞き流している、咀嚼して聞かない」という報告がされている。薦田氏によると、最近の少なからぬ子供は他者の話や指示を注意して聴き、ひとつひとつ内容を咀嚼する訓練がされていないために、真の意味で「考える」ことができないのではないかとの疑念を表している。思考力を伴う数学ができず、暗記の数合わせでテストをクリアして行くために、ある一定の学習段階になると挫折する子どもが多いというのである。これは、理科に置いて昔から言われていたことに通じる。つまり、暗記や単純な現象理解で対処できる範囲で理科が好きな子どもも、思考力が大きく物を言う電気やイオンの範囲になると、とたんに嫌いな子が増えるのである。このような傾向が、懸念される程に助長されて来たのが、昨今なのではないだろうか。

これについては、いくつかの要因が原因として推察される。

まず考えられる要因に、コミュニケーションの不足がある。これは、幼児の側のコミュニケーション能力の不足から発する場合が多い。しかしながら、コミュニケーション能力や体験の不足側のみではなく、教師の側の幼児の状況の観察不足や、誤認から「指示が聞けない」という状況が発生している場合もある。

RくんとJちゃんが手を繋ぐはずの所、二人は手を繋ぐずバラバラに歩いていた。何度も「Rくん、手を繋いであげて！」と声を掛けたが無反応で先に行き、その結果加藤先生にかなりきつく注意を受ける事となってしまった。そして、帰りのバスの際もRくんとJちゃんが手を繋ぐ事になっていたのだが、再び手を繋いでおらず、見るとJちゃんが「お荷物重たいからいいの！」と言って、両手で絵本袋を持っていた。確認すると特に重くも無く、我がままで言っているのが伝わって来たので、もしかしてと思いRくんに確認すると、やはり朝もRくんが繋がなかったのではなく、Jちゃんが嫌がったのだと言う事であった。良く見ずして勝手な思い込みで決めつける事の恐ろしさを感じる出来事であった。先日の講演会で聞いた「子どもにはどうしたの？どうしたいの？と常に思いを聞き、丁寧に接する事が基本で、その事によって子どもも人に丁寧に接する事が出来るようになるのだ」とのお話を改めて思いだし、本当にその通りであると実感し反省した。

また、家庭内での対人関係に関する経験が少なく、子供の中に社会性そのものが十分に育っていないような場合もある。顕著に見られるのが「挨拶」ができないことであり、また、社会的存在として、自分が相対しているのが「他者」であるということの理解が十分に発達していないことも一因となっている。

スクールバスに乗車していて、乗降時の挨拶をしない子どもが多い事や、学園に到着してから警備の方が「おはよう」と挨拶をしてくれているのに、知らん顔をする子どもが多い事がとても気になっています。その都度、子ども達には指導しています。挨拶をする子どもは決まっています。年長児は、挨拶が身に付いていてもおかしくない年齢なので、自然と挨拶できるように見本になっていきたいと思っています。

Dちゃんと、Hちゃんが、隣に座っていました。すると、通学かばんの名札の紙をHちゃんが、ぐしゃぐしゃにしまいました。それを、見つけた私はHちゃんに、「お名前が書かれているものを、ぐしゃぐしゃにされたら、悲しい気持ちができるよ。ごめんなさい、してください」と言葉がけしました。ですが、Hちゃんは黙っているだけで、何も話そうとしません。「今、Dちゃんは悲しい気持ちしているよ」「Hちゃんも、悲しいことがあったら、ごめんなさいって言ってもらいたいでしょう」と促しますが、結局ごめんなさいを言うことができませんでした。あまり、長い時間叱るのも良くないと感じた私は、また今度お話ししようと思いました。Dちゃんの様子を見ていても、楽しそうに話している姿が見られたので、今日はやめることにしました。以前の日誌にも、たんぼぼ組の、Kくんの事例の中で、ごめんなさいが言えないということを書きました。年少組の子どもたちにとっては、「ごめんなさい」と言うことが、難しいことなのかと感じました。なぜ、ごめんなさいを言わなくてはいけないのか、ただ「ごめんなさい」という言えばいいのではなく、どんな気持ちで言えばいいのかを教えていけたら良いと感じました。

先ほども述べたように最近よく見られるようになってきたのが、指示を聞けていない子どもだ。これも、状況によって解釈が難しいが、指示に対して行動することができない。そして、指示を何度でも聞き返すという状況がある。これは子供達が、指示を確認しようと、指示を与えた直後に聞き返すのだが、これが自分自身の安心の為なのか、それとも子どもたちが指示を咀嚼して理解することができていないのかが不分明でもある。

一斉に説明しましたが、いざ持ち帰りの準備となるとすぐさま「先生、何を持ち帰りますか？」がところどころから聞こえてきました。自分の説明が良くなかったのかと思い、もう一度説明をすると、理解していない人がこんなにいるんだということがわかり、正直驚きました。自分事として聞いていない、集中して聞けない・等。もも組の中にはしっかり聞いて行動できる人はいるはずなのですが、自信を持って取り組めていないという人が多いように思いました。率先して行える人が今のところまだクラスではわかりません。

聞く習慣を持てていない子どもの改善はなかなかむずかしい。この原因としては、指示・理解・行動という流れが、家庭の中で確認されていないのではないかと考えられる。このような流れを体験していない為に、指示されたことへのイメージが浮かばないのではないだろうか。すなわち、幼稚園の中で行われる様々な生活体験だけではなく、子供達の家庭内での生活体験が乏しくなり、その結果として日常的な生活の流れが子供達自身の行動として自らのものになっていないと思われる。

この問題を解決する為には、子供達が日常的な生活の中で吸収する様々な経験が、子どもたちの発達に大きな影響を与えるという事を保護者に伝え、家庭での日常的体験の質と量を改善していく必要がある。



また、体験だけをイベント的に大量に用意して与えることが重要なのではなく、体験の用意の過程を見せたり、親が子どもと一緒に体験を積んでいく事も重要である。つまり、生活という文脈に乗っ取った大人と子どもの相互がシステムとしてかかわり合う日常体験を、丸ごと改善し増やすことが望まれる。

また幼稚園においては、単に大人から子どもに語りかける・指示を与えるだけではなく、子ども同士で話しあう時間を設けることで、他者の発言を「聞く」という事が少しずつ入っていくのではないだろうか。

そしてまた指示を、単に子どもに投げかけるだけではなく、再度子ども達に聞き返すことにより、子どもも振り返り指示を確認できる。「聞くことができない」のは子どもの注意力が足りないとして怒るのではいけない。教師は単に子どもに対して指示を与えるだけではなく、与えられた指示を子どもが聞いていたのか、聞いていたらどの程度理解しているのかを把握し、それに基づいた指導を組み立て直していく必要がある。そして、個々の子どもに合わせた対応指導が必要となる。

しかしながら、「聞けない」という問題には子供の生活環境（家庭内での家族との関わりの方：よく会話をしているか、TV・DVDなどを見ている時間の法が長くないか等）、家族以外の人との交際歴等の様々な複合的な要素が影響している。

ここで重要なのは、教師が期待している子供の日常的行動から外れた意外性を見せるような特異な子供の活動を保育者全体で共有しておく事だ。特異な活動状況を見せる子供のデータを保育者全体で共有する事により、一人の保育者の目からだけではなく、複数の保育者の目から子供のあり方を見る事により、複合的な要素を解析していく事ができる。すなわち子どもの性格を早く知り、その個に応じた指導の仕方を考える事が大切となる。そのためには、保育者が自分の受け持ちでない子供であっても、気になる行動については記録し、それを保育者全体で共有し、話し合う事ができる環境の整備が不可欠ともなる。

指示が聞けなくて、危険を伴う行動に出てしまう。これも、体験不足に繋がっているように思われる。これには、子供が危険な事をした時に真剣に注意しない傾向、指示通りにできた事に対して、褒めることを怠ることも悪影響を与えていると考えられる。

### <対話の重要性・ソクラテス方式「対話の方法」>

幼稚園はもとより家庭では特に、幼児の頃から子どもに質問をたくさん投げかけ、一つ一つをきちんと考えさせ、考えたことを答えさせることを実践したい。

「哲学（フィロソフィー）」の祖としてのソクラテスが、対話法でもって人々を導いたように、子供が興味を持った現象について、子供なりにまとめさせ、「言葉」にして表現させる。それに対して、対話の相手となった親あるいは先生が疑念を示したり、ちょっとしたサジェスションをして再び子供にその現象を把握させ直させ、再度言語化させる。このプロセスを繰り返しおこなっていくことによって、子供の示す現象の基づいたしかしながら大人の目からすると見当はずれな現象の把握を修正させ、大人の持つ知見のレベルへと

引き上げていく。

このような対話の繰り返しを行うためには、子供に対する大人の側でもそれなりの準備と知見が必要であることは忘れてはならない。

大人の側の準備が不十分であり、現象をしかと把握できないような場合は、あるいは現象をきちんと子供に説明できるような現象に対する理解を大人の側が書いている場合には、ソクラテス的な対話法を試みてはならない。むしろ不十分な試行は子供の認識の枠組みを歪めてしまう危険性すらある。親・教師の側での十分な学習が、幼児を導いていく場合には不可欠となる。

このようなソクラテス的な対話法にまで進めないとしても、子供の十分な発達のためにはコミュニケーションが必要である。これは、親と子供が物理的に対面し、言葉をお互いにかかわることによって遂行される。しかしながら、コミュニケーションは親の側からの一方的な語りかけとか、お説教を意味しない。コミュニケーションは、双方向性が重要である。親が語りかけ、それに対して子供がなんらかの反応を示す。その反応に対して親が再び語りかけるといった行為が重要なのだ。子供の反応を無視して、親が一方的に買ったっているとか、親が威圧して子供からの反応を拒否し、反応を起こさないようにしておいて「うちの子は良く言うことを聞く」などと称する親がいたりするが、これはコミュニケーションの拒否以外の何物でもない。

多くの場合、保護者が語りかける、子供が保護者に要求するといった片方向の言語的コミュニケーションは成立している。しかしながら、「おしゃべり」といった形で、たわいもない事柄でもいいから言葉のやり取りというかキャッチボールをする時間を十分に確保することこそが重要だ。

言語に接する機会として、TVとかDVDなどの片務的な情報の授受の機会の方が時間的に長いのではないか。あるいは、親が一方的に語りかけて、頷きとか、ハイといった反応を示しているだけのものを双方向的なコミュニケーションととらえていないか。

意味のある言語的コミュニケーションの機会を増やし、さらにその過程で常に思考させることは、前述の日常体験の質を底上げする力となると考える。

他園の事例であるが、以下はまさに双方向の対話が成立している場面である。

A子は自分の思ったことはなんでも発表する。昨日いつものように発表すると、他の子供達から「またA子ちゃん」との声。

礼拝後子供達から問題が出た。

A子「先生あたし言いたいことあるけど“またあ”って言われるから言わない・・・」と悲しそう。

分級の時間

先生「自分で思ったことを発表するってわるいこと？」

みんな「ううん」

先生「勇気を出してみんなも手をあげてね。みんなのおもっていることわからないものね。」

それ以降、A子ちゃんだけではなく、思っていることは何度発表し、また誰が言っても良いのだという子供達の自然の流れが生まれてきた。

この例は、双方向のコミュニケーションは自然発生的に生まれてくるのではなく、保育者の側からのそれなりの補助が必要であることを示している。コミュニケーション阻害あるいはコミュニケーションの萌芽を保育者が感知して、子供達がコミュニケーションを活発に行うようへと誘導していくことが重要であることを上の例は示している。

### ＜全てにおいて重要な実体験＞

子供の成長にとってもっとも重要なのが、実際の体験である。今回の事例には、次のようなものがある。

年中なりに色々工夫して楽しんでいましたが、作った折り紙同士をくっつけていたセロテープがなくなってしまいました。「せんせい。セロテープ無いよ」と言ってきましたが、私はばら組の製作用品のストック場所が解らなかったので「セロテープ見つからないなあ」と探していると「リボンで結んだらどうかな」「のりでもいいよね」と代案を考えて言ってきた子ども達。糊が見つかったので、無事に製作を続行していました。多少無いものがある場面も、子ども達が自分で考えて、工夫や代案を引き出すのに良い機会なのだと思います。

教えられたものは身につかない。すべては「体験」「実践」し「体得」していく中で身に付き、自分自身で体得していく「実体験」が大事である。

最近の幼稚園では、保育のなかでお仕事として何らかの工作を行うことが多い。そしてこのような「おしごと」は、こじんまりと「きれい」にまとまった工作物を保護者に対して提示し、「お子さんはこのように発達してますよ」とか、「当幼稚園では、このようにしっかりと保育を行っていますよ」といったアリバイ作りに利用される。このような場合には、業者によって提供される教材が使われ、不器用な子供でもそれなりにまとまった作品を作るあげることができるようになっている。

しかしこのような作品は、「お仕事」として子供達に外部から与えられる作業ノルマ、子供達の器用さとか、道具使用の経験を積ませるものであっても、こどもたちの内発的な創造性を育成するものではない。

もちろん、このように道具を使いこなす経験を積むことは重要ではある。しかしこのような「おしごと」は、創造性を表出するための準備段階として必要であっても、保育の主眼となってはならないものにすぎない。

もも組のBちゃん、Mちゃん、さくら組のYちゃんが遊んでいるところに入りたいと言いました。そこには、たんぼぼ組のRちゃんもいました。Kちゃんに「入れて」を言うように促し、しばらく子どもたちの様子を見ていました。年長組の遊びは、世界観のあるごっこ遊びでした。私は見ていて一緒に遊ぶことは年少組の子たちには、難しい

内容だと感じました。Rちゃんも、Kちゃんも遊びには入ることができず、年長組の後ろにただ着いて行くだけでした。私は、見ていて楽しいのかな？と感じました。ですが子どもたちは、興味津々で飽きることなく年長組の子どもたちの後ろを歩いていました。私は、遊びに参加することだけが楽しい遊びだと思っていましたが、年長組の遊びを観察することも大切な遊びの1つであるのだと知ることができました。遊びが広がるきっかけになればと思います。

子どもたちに 沢山刺激を与える。養分を与えることが大切である。

登園してきた子どもが遠い砂場の方を指して、「きれいなお花が咲いてるね」と何人かの子が言いました。昨日までは咲いていなかったアジサイのお花が、今朝は色々な色鮮やかな色で咲いていました。「ほんとだね。きれいだね。あのお花はアジサイっていうんだよ」と教えました。子どもの観察力というのは本当にすごいなぁと感心すると同時に、感性の鋭さを改めて感じました。

このような「体験」は、教師が過度に準備を行い、想定された「教育結果」を求めるような場合に出てくるものではない。むしろ、日常的な巧まない触れ合いのなかではじめて現れてくるのである。そして、このようなコミュニケーション状況は、保育者が自分自身を「教育者」として子供達よりも優位な存在として、そして子供達を導かれるべき劣位の存在として位置付けるような場合には現れてこない。子供達を未熟ではあるが対等の存在として認め、子供達の発見を、柔軟な視線で受け止め、喜び、驚くことができこそ、はじめて現れてくるものである。

保育事例については、東京都調布市にある晃華学園マリアの園幼稚園の先生方によるものです。

以下の先生方の協力に感謝します。

山口陽子、久保千洋、西村千佳、平井ひろみ、中西紀恵、新井絹子、山下明希、長峰真美、古川奈那、上垣内萌、並木茉奈（敬称略）

各先生から提出された事例を精選して事例集を作成、それをもとに8月末日にディスカッションを行い総括した。この論考では、その事例集の一部を掲載し、また総括に基づき考察を加えています。

結城千代子は2015年度よりマリアの園幼稚園長にもに就任しています。

Teacher-side problems in guiding children's proper recognition of nature  
(and scientific knowledge), based on the obserbation report at a kindergarden

Toshiya, YUUKI, Chiyoko, YUUKI

Authors recently experience that the not a few students do not follow teacher's (written and oral) instruction. This symptom is becoming a dominative factor in reent university students. This situateion is quietly similar to that of the 3 or 4 years kindergarden child. We asked the teachers of Maria-no sono Kindergarden of chofu to report the child behaveor in kindergarden.

This article is a report to preliminary analyze the important factos in child development observed in kindergarden. Also through the analysis of children's social behaveor, we tried to point out factors that would influence the normal development of children.